

巻頭言

味わいのある保育を求めて

高杉 自子



保育が変わってきたのでは

「主体性というと、活動に取りかかる姿だけを問題にする人が多いが、本当は、子どもが活動を終えた時に、自分の思いがかなったのを確かめ、後々まで思い出しては味わい知って（鑑賞して）いとおしむことができることなのだ」とどなたの言葉だったのかは忘れませんが、私は深く心を打たれ納得できた。子どもの自主性とか主体性を問う時、いつも思い出す言葉である。

「子どもは“味わう”なんてできるか？」と反論する人もいる。しかし、子ども自身が必死に自分の心身を動かし活動できた実感を得たとき、「味わい知る」行為をし、他者の承認を得ようとする。あるいは何回も手にして満足したり、次の新しい課題を求めて行動しはじめたりする。こうして子どもの活動は続いていくのだと気づかされた。

長い間私は、さまざまな保育現場をみてきたのだが、この頃気になることの一つにこの“味わい知る”

喜びをもたらす保育が減少してきたように思う。一方では、保育を語り合う時に、自発性とか主体性、自主的などの言葉は、ごく当たり前のこととして押さえられるようになった。ただ、保育の姿の中で、子どもと保育者が共にじつくりと活動に取り組み、心豊かな味わいを共有するような光景にはあまり出会わないのだ。なぜ？ どうしてなのか？ “保育の味” “味のある保育” とは程遠く、その代わり、型はめ、通り一遍の保育一色になり、大きな声で唱えさせ、揃った行為をさせて教師が安心する保育、お互いの関係が見えない保育が気になる。

子どもの生活の変化

原因を探れば、人間としての基本的生活が崩壊しつつある。例えば、家族バラバラに食事や睡眠をとるホテル家族とか、家に閉じこもり長時間テレビやテレビゲームに時間を奪われる子どもとか、あるいは、親の生活リズムに振り廻され、夜型の生活に変化し、昼間

はボーッとして活動意欲も食欲もわかない子ども達に疑問も持たず子育て機能を失いつつある家庭が増加している。一方「学級崩壊」や不登校生が増加している学校は、その現象に振り廻され、人間が育ち合い学び合う場という本質の自覚から遠のいていくような気がしてならない。しかし焦るばかりでは解決できない。

新しい提言を受けて

今回「幼児教育の充実に向けて」——新しい時代の幼稚園教育を実現するための施策提言——（中間報告）平成十二年七月二十四日、幼児教育の振興に関する調査研究協力者会合でまとめたものが文部省から発表された。

毎日のニュースを見るのが怖いような、全く思いがけない犯罪や事件を少年だけでなく、親たる大人も起こす情けない現状の危機や少子化傾向に、新しい世紀に向けての教育の見直しの必要に答えたのであろうか。幼児期の重要性を社会全般に訴え、家庭や地域、

そして幼児の集団施設保育、学校教育が一丸となって子育て支援活動を充実し、新しい時代の幼稚園教育が実現できるような施策の必要を訴え教育予算の獲得を内容としたものと思われる。今回その提言にふれながら現場の受けとめ方について考えていきたい。現場ではこのような提言は言葉だけが一人歩きをする傾向がある。例えば「生きる力」の必要が叫ばれた時は、習字の時間に書かせて掲示板一杯にした小学校を見て呆れたことがある。「生きる力」「心の教育」と研究会で取りあげられても現状は依然として変わらない。むしろ、問題化は進行するばかりのようだ。こうした現状は文部省の方針に従い言葉遊びに終わってしまふのだ。これでよいか「一人一人を大切に」「豊かな心を育てる」という言葉を唱えていれば、実践している錯覚に陥るのかもしれないと思う。現場は「実践の宝庫」なのである。実践こそ強みである。現場は、それぞれの園の実態をふまえ、その園の実情に合わせて内容や方法を工夫することができる。他者のモデルは参



考になっても自園の実情には合わない。”現実を直視し、問題と課題を見出し、それを解決するための方策を練って実践する”。足元から、出来ることから一つ一つ取り組み検討を重ね、地道で丁寧な取り組みが変化を齎すのだ。実践の検討を一人よがりにならないようにするためには、何人かで語り合うことである。視点が多様になるのだ。但し、一人一人が自分のこととして考え、自分の主張をもつことが基本的には必要である。

「ティーム保育」の導入

このようなことに関連して今回の提言では次のように述べている。

新幼稚園教育要領の実践化を図るためには、幼稚園全体の協力的体制を高め、きめ細かい指導の工夫を図ることが必要となり複数の教師が協同で保育にあたる

「ティーム保育」の導入が不可欠」と強調されている。以前から幼稚園では複数担任制を導入しているところも多いが、単に物理的な問題としてとらえないことが肝要である。実際には、大変難しい問題が潜んでいる。筆者も三十数年前に経験したが、学級王国、担任根性を捨て、互いに先輩後輩の力関係を固定せず、子ども一人一人のより深い理解と必要な援助を求めるためへの努力へ徹することなのである。簡単な言葉で言えば、ティームを組む教師は互いに気が合い、通じ合い、委ね合うことができる信頼関係が築かれなければならない仕事なのだ。お互いに尊重し合い、指摘されたことは素直に受け止め自らの糧とし、他者から学び視野を広め、善さや真実を大切にし、幼児側に立つて考えることを第一義として選択するトレーニングをして、自分づくりに励んでいこうというのである。その姿勢が根底になれば形骸化し、逃避や閉鎖の道を辿ることになる。お互いにどんなに助けられるかに気づき発見や子どもの成長の喜びを共有できれば保育は

楽しくなる。教師の協力する姿は、子どもに協力の大切さを生活の中で自然に伝えることができる。報告書に教師の資質向上も合わせて書かれていることに着目すべきであろう。

「幼稚園と小学校の連携推進」について

私ごとで恐縮だが筆者は学芸大学附属校に就任し、学校の方針で小学校教員を振り出しに、幼・小を往来させられ、その間に幼稚園教育の魅力にほだされて遂に自分の意志で一生の仕事に幼児教育を選んだ経歴を持つている。

だから幼小関連を自分の研究テーマにしようと思った。ところが都教育委員会で幼小の関連をささげる壁の厚さに根負けしたのが偽らざる本音である。小学校教師の仕事は自分の担当学年の授業で精一杯で保育のことを幼小で話し合う時間がとれない。まして学校と幼稚園の交流も様々な方法で私は四十年前から試みってきた。職員会議も研究会も行事も一緒だったが、小学

校側が小学校の学年関係と同じような意識で共にしようとするまで七年かかった。今回の報告書の意図は有難いが、幼稚園が小学校への片思い、小学校側が理解をもつのは至難のわざである。教員免許併有の機会の拡大の推進は大切なことだが今の情勢だと小学校の幼稚園が蔓延し幼児期の特性は不理解で終わり、心配になる。

行政は幼稚園だけに連携を求め小学校側への働きかけが消極的な気がする。結局、表面的な連携で強者が弱者へ要求する形だけに終わらないか。幼四歳～六年生まで八年間続けて担任した私が発達観、子ども観、教育観などの筋がとおるまでには随分時間が必要だったことを述懐する。

幼稚園と保育所の連携の推進について

幼稚園と保育所は同じ幼児期の子どもの達の集団施設教育である。当然双方の連携とはいうが保育の内容・方法についての共通理解が必要である。施設機能は異

なるために、今までは連携がとれていたところは少なかった。今回の報告にもある通り、施設の共用化等や教員と保育士の合同研修や、子育て支援事業の連携実施、行事の合同化、情報交換等々の例が挙げられているが当然大切なことだと思う。この問題でも〇〇をする“ということよりも、どのような気持ちを持ち心を開いて合同で行うことができるかが問題なのである。お互いのよさに気づき、わけへだてなく交流し合う関係づくりに励むための親の意識改革こそ大切ではないか。紙面の都合上子育て支援の問題にふれかねたが、これこそ地域ぐるみの振興に向け、具体的に目的、理由、内容方法を地域の実情を踏まえ身近なことからじっくりとていねいに紡いでいくことが大切である。何れにしても、味わい深い濃密な保育を子どもと共に創造していく“ことこそ課題なのだ。そのためには教師一人一人の情熱とエネルギーが必要である。

(子どもと保育総合研究所)